京都工芸繊維大学

氏　　名	ん　あいりん **Ng Ailing**
学位(専攻分野)	博　士（学術）
学位記番号	博乙第　１６８　号
学位授与の日付	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 4 項該当
学位論文題目	**マレーシア・ペナンの伝統型ショップハウスの空間構成と利用状況**
審査委員	(主査)教授　森田孝夫 教授　日向　進 教授　木村博昭 名誉教授　西村征一郎 准教授　阪田弘一

論文内容の要旨

本論文の内容は、マレーシア・ペナンに立地する歴史的な職住近接型住宅である伝統型ショップハウスの建設当時から増改築を経た現状までの空間構成と利用状況の変遷に関して、改修手法も含めて調査し、変遷の傾向および要因を検討することにより、伝統型ショップハウスの再生・持続的活用のための計画的知見を得ることを目的とした研究であり、６章から構成されている。

第１章では、研究の背景として、ショップハウスが広く分布する東南アジアの中でも、マレーシアに存在するショップハウスが歴史的価値を有することについて確認し、また、2002 年の家賃統制令の撤廃によってショップハウスが減少・消失する危険性を指摘し、本論文の意義と独自性を説明している。

第２章では、マレーシアや周辺諸国におけるショップハウス成立の背景となるヨーロッパ諸国による植民地化にともなう都市形成過程について、各種の文献・史料をもとに整理している。

申請論文における重要な内容は、第３章から第６章となる。

第３章では、各種文献に加え、現地における事例調査をもとに、ショップハウスの空間特性を明らかにしている。具体的には、ショップハウスを構成する要素の中でも、歩行者のための公共通路でありながらサービスヤードや接客空間としても機能し、また街に統一感をもたらす重要な景観でもある「ベランダウェイ」、仕事場と住居をやわらかく分離し光や風を取り込むオープンスペースであり、多様な住まい方にあわせた改修を可能にするリザーブスペースでもある「中庭・裏庭」などを、今日まで持続的に利用されてきたショップハウスの重要な要素として位置づけ、第４章以降の分析の手がかりとしている。

第４章では、次章以降のマレーシア・ペナンにおけるショップハウスの空間構成と利用実態の事例調査および比較分析のために、ペナンのショップハウス群で構成される３つの街区（市街でも成立時期の異なる「旧市街ｉ」と「旧市街ii」、そして同じ植民地時期に建てられてはいるが周辺環境の異なる「郊外」）について調査を実施し、街区特性を捉えるための要素として「建物用途」「ファサード様式」「ベランダウェイの公的利用度」「中庭・裏庭の存在」に着目、それぞれの要

素の構成割合から各街区の特性を明らかにしている。

第５章では、４章で扱った３街区において典型的なショップハウスを２～４事例それぞれ選定し、建物の実測調査および居住者へのヒアリング調査を実施し、増改築によるショップハウスの空間利用と利用状況の変遷を把握している。それをもとに、持続的に利用されてきたショップハウスの空間利用の一般的傾向を見出すとともに、空間利用の目的と選択された改修手法からそのメカニズムを分析している。また、逆に個々のショップハウスの空間構成や利用実態に認められた差異がどのような要因から生じているのか、賃借人属性や建物特性、地域特性などとの関係から考察している。その結果、

１）旧市街では、敷地を拡張できない状況のもと、利用形態や賃借人属性の変化にともない増改築を繰り返す過程において、裏庭にバルコニーが出現→消失し、最終的には裏庭が水回り空間として屋内化され上階に寝室が追加されオープンスペースであった中庭・裏庭が消失する、

２）郊外では、裏庭の奥に向けて敷地を拡張することが可能な状況のもと、生活様式や家族構成の変化にともない増改築を繰り返す過程において、店舗拡張や水回り空間を屋内化するために一階部分だけが奥へ延びていき、最終的に細長いプランとなっていく、

という一般的傾向が明らかにされている。一方、利用状況（公私性）については、

３）旧市街では、店舗を第二次賃借人に又貸しするなど賃借人属性が変化することで店舗と居住空間が分断されたり、店舗の衰退によりベランダウェイにおける店舗機能のはみ出しがみられなくなると公私の交錯が喪失される、

４）郊外では、家族構成の変化の影響を受けて居間と店舗部分の間に寝室を設けたり、あるいは店舗が衰退しベランダウェイとのつながりが失われることにより公私の交錯が喪失されていく、

という傾向などが明らかにされている。

第６章では、旧市街と郊外における空間構成と利用状況の変遷過程を比較し、その結果をうけて今後のペナンにおける伝統型ショップハウスの持続的活用のための空間利用手法を検討している。そこでは、ショップハウス本来の賑わいを再生するためには「公私の交錯」を活発化させることが重要であり、そのためには伝統的な空間配列の維持、特に店舗とベランダウェイの関係性を重視すべきであることを指摘している。さらには、伝統的な空間配列を維持しながら、快適性を左右する「採光・通風」を確保するために「中庭・裏庭」の復元、緑化などの提案も行っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、マレーシア・ペナンにおける伝統的ショップハウスの建設当時からの空間構成および利用状況の変遷を研究している。東南アジアにおけるショップハウスに関する既往研究としては、泉田英雄によるものが起点となる。泉田によれば、19 世紀にラッフルズの都市計画に基づき大量に建設されたシンガポールにおける事例が、その後東南アジアに広くショップハウスを普及させたという点から重要な位置づけにあるとされており、関連研究も複数存在する。一方、それ以前から中国系住民が自ら建設していたとされるペナンやマラッカにおけるショップハウスは

未だ十分に解明されていない。これらはショップハウスの成立過程を明らかにする上で貴重な意味を持つことになり、本論文は歴史的資料として一定の価値を有するものと判断される。本論文では、ショップハウスにおける商業活動、家族生活、近隣づきあい等の実態とショップハウスの使われ方や改修・増築のパターンが詳細にかつ考現学的に記録されており、その図式は貴重な計画資料ともなりうる。

また、現在ペナンは 2002 年まで存在した家賃統制令の影響によりマレーシアで最も多くのショップハウスが存在する一方で、その老朽化も激しく、どのように再生していくかという問題に直面している。こうした背景から、その解決につながる計画的知見を得ようとする本論文の目的は、社会的にも今日的意義が認められる。

さらに、本論文のスタンスは歴史的価値を有する建物としてショップハウスを扱い、その保存にむけて原型を復元するというものとは異なる。街区を形成する職住近接型住宅群として、地域に賑わいをもたらしてきたショップハウス本来の役割を担い続けながら、現代的な生活にも対応した「再生」を目指そうとするものである。こうした実践をにらんだ計画的視点を有している点は、研究の有用性という観点から評価される。そのために、建設当初から現代に至るまでの増改築の変遷過程を詳細に調査し、空間構成や利用状況の変遷の傾向を把握するとともに、そのメカニズムを敷地特性や居住者属性・建物用途の変容などとの関連から見出そうとする方法論は新規なものではないが適切であると考えられ、ペナンにおける地域性も踏まえた再生のための計画的知見を得るに至っている。

最後に、ショップハウスは東南アジアに広くみられる伝統的職住近接住宅の一形式であり、店＋住宅による伝統的な職住近接住宅という意味では、京町家などもそのひとつとして挙げることができる。本研究の成果からは、日本の伝統的職住近接住宅の持続的活用に関し新たな視点を提供すると期待される。

本論文の基礎となる内容は、日本建築学会の論文集に審査を経て、申請者を筆頭とする論文として公表されている。その他、参考論文として(参１)がある。

〔基礎となる学術論文〕

(1)ン・アイリーン、高木真人、阪田弘一、西村征一郎：マレーシア・ペナン島のショップハウスに関する研究―ジョージタウン市における伝統型ショップハウスの空間構成について―、日本建築学会計画系論文集、第 579 号、pp1-7、2005.11

(2)ン・アイリーン、高木真人、森田孝夫、阪田弘一、西村征一郎：マレーシア・ペナン郊外の伝統型ショップハウスに関する研究―伝統型職住密接住宅により形成される商店街の衰退過程について―、日本建築学会地域施設計画研究、第 26 号、pp199-204、2008.7

〔参考論文〕

(参 1)高木真人、ウ・ヒョンジョン、森田孝夫、阪田弘一、ン・アイリーン：韓国・ソウル北村地域における都市型韓屋の改修実態に関する研究、住宅系研究報告会論文集、日本建築学会、pp259-264、2007.12